

追悼

戦中派の魂魄

— 追悼・大澤俊夫先生 —

川久保 剛

大澤先生、私のような初学者にも追悼文を執筆する機会を与えて頂きましたので、先生とのご縁や先生から頂いた感化を中心に、想うところを記させて頂きます。先生にはじめてお目にかかったのは、麗澤大学を会場に開催された比較思想学会の懇親会においてでした。麗澤大学の水野治太郎先生のご紹介で大澤先生にご挨拶する機会を得たのです。私が大学院で日本思想史を専攻していることを申し上げると、大澤先生は大変喜ばれ、この分野の開拓者の一人である倫理学者・和辻哲郎に触れながら、日本思想史がいかに重要な学問分野であるかお話し下さいました。また、麗澤大学並びにモラロジー研究所の創立者である思想家・廣池千九郎を日本思想史の観点から研究する意義についてご教示下さいました。散会后には、わざわざ会場の隅にいた私のもとまで来て下さり、「君に会えたのは収穫だった」とおっしゃって下さり、ただただ恐縮したことを昨日のことに覚えております。

これをご縁となり、仙台で、再び先生の聲咳に接する機会を頂きました。所要で来仙された先生は、当時東北大学で学んでいた私を、お食事にお誘い下さったのです。ご馳走を頂きながら、さまざまな教訓をお授

け頂きました。学問は基礎が重要であること、人文学は古典研究が要であること、人間は「畏れる心」を忘れてはならないこと。この「畏れる心」こそ廣池千九郎の「道徳科学」の根幹にある精神であること。また、学生時代の先生の知的遍歴についても御披露下さいました。和辻哲郎の名著『偶像再興』に魂を揺さぶられたこと、京都大学で教育人間学の下程勇吉教授の薫陶を受けたこと、哲学者・美学者・教育家の木村素衛に尊敬の念を抱いていたこと。そして忘れられないのが、哲学者・北山淳友に関するご質問です。北山は戦前、西欧哲学の枠組から仏教を再構成する研究で高く評価され、マールブルク大学やカレル大学の教授を務めた国際的な哲学者ですが、帰国を望みながらも果たせず異国で客死しました。その北山が、大澤先生と同郷（静岡・焼津）で、ご遺族の方が彼の地での足跡を調べる手掛かりを探しておられるとのことでした。日本思想史の方面で北山の消息を知る人はいないだろうか、というお尋ねでした。残念ながらお答えすることは出来ませんが、人との縁を大事にし、人の心を大切にされる大澤先生のお姿に接することが出来ました。

仙台でもう一度お会いする機会を頂きました。先生は、杜の都・仙台の中心を走る緑美しき青葉通りを大変好んでおられたようでしたが、その通りに面するホテルでお食事をご馳走になりながら、私を（財）モラロジー研究所の研究部門である道徳科学研究センターに研究員として推薦する意向があることをお伝え下さいました。あわせて、日本思想史の観点から廣池千九郎を研究するよう激励して頂きました。私は麗澤系列の中学・高校を卒業したこともあり、思想家・廣池千九郎には特別な関心を抱いてきました。ですから、大澤先生のお気持ちは大変有り難く、感謝の念とともに、このお話しをお受けすることに致しました。それから前から水野先生のご推薦で麗澤大学に外国語学部の共通科目の担当者として奉職することが決まっております。

したので、わたしは幸運にも、廣池を原点とする二つの法人で仕事をする機会を与えられたのです。それだけに、大澤先生から頂いた「日本思想史から見た廣池千九郎」という研究テーマに精一杯取り組んで参りたいと考えております。現在取り組んでいる研究テーマをまとめた暁には、この課題に着手したいと考えております。

さて、大澤先生、現在わたくしが麗澤大学で挑戦していること、そして今後取り組みたいことを教育活動の面を中心にご報告して、この一文を締め括らせて頂きたいと思えます。

私は麗澤大学に奉職して以来、建学理念やその学的基础である「道徳科学」に関する教育・研究プログラムとそれ以外の教育・研究プログラムとの間に、双方の担当者の意図に反して、見えない壁が存在していることに問題を感じてきました。そして、そのことが学生の学びの環境にも大きな影響を与えていることに危惧を覚えてきました。建学理念やその学的基础は本来、大学というコミュニティに集う全てのメンバーに関するテーマだと思います。そして現在、日本の大学は、その存在意義の確認が求められ、建学理念を基軸とした大学の特色の再定義やそれを踏まえた再組織化が強く要請されています。ですから、これからは大学コミュニティに帰属する全てのメンバーが、濃淡はあれ、なんらかのかたちで、建学理念の教育・研究に関する問題意識を共有していくことが求められていくと思います。そこで、私なりに出来ることを実践していくと考えています。現在取り組んでいるのは、大学の理念や歴史、特色を学び、学生自らが大学の未来像を構想していく麗澤独自の「自校学習」の実践です。学生有志とともに、またこれまで「道徳科学」関連のプログラムと接点の無かった教員スタッフにも活動に加わって頂き、新たな学びの環境の創造に挑戦中です。

今後は、学外の研究者にも参加を呼びかけて、麗澤の理念や「道德科学」について自由に議論できる場を、学内に設けていきたいと考えております。幸い麗澤大学では、中山理学長の強力なリーダーシップのもと、「道德科学教育センター」が設立されましたので、このセンターを拠点に、多くの先人の業績から学びながら、新しい環境作りに取り組んでいきたいと念願しております。

大澤先生、残念ながら、先生にご指導頂いた期間は決して長くはありませんでした。むしろ非常に短いものでしかありませんでした。しかしその中でも、頬を紅潮させて、力を込めて、廣池千九郎の人と思想についてお話しになるその気迫みなぎるお姿は、私の目に焼きついております。

思えば、先生はいわゆる戦中派世代でいらっしやいました。戦中派は、戦前と戦後の間で、わが国の急激な価値観の転換に直面し、人生の帰趨に迷い、不安定な生涯を強いられた世代だと理解しております。そしてそのような困難な状況にも関らず、ニーチェが不気味な訪問客と呼んだ「ニヒリズム」をはねのけるようにして、力強く、真摯に、そして着実に人生を歩まれた世代という印象を受けております。

先生は、その世代のお一人として、私のような戦後日本の恩恵の中で生まれ育った世代からは想像もできないご苦労をご経験されたことと推察いたします。

先生と廣池・モラロジーとの関連を理解するには、この戦中派世代でいらしたという事実を十分に踏まえる必要があるように考えております。

私は、戦中派としての先生の迫力ある実存に接し、短い期間でしたが、そこから教え導かれたことに、大きな意味と幸運と感じております。

先生、私は先生の気迫に充ちた魂魄を想起しながら、麗澤大学における研究・教育活動の進展に参画して

いきたいと思います。そして、先生から頂いたご縁をこれからも大事に育てていきたいと思います。本当にありがとうございます。